

華人文化圏に広がる新劇

—— オスカー・ワイルド『ウィンダムミア夫人の扇』を例に

鈴木直子

二〇一七年はちょうど中国話劇が誕生して百十周年にあたる。中国では近代劇を話劇と称し、当時日本に留学していた中国人学生たちの演劇活動を話劇の誕生と見なすためだ。一九〇七年、東京で結成された芸術団体春柳社の上演を機に、新しい演劇の波は中国へともたらされた。もっとも当時の春柳社が手本としていたのは新派劇であり、辛亥革命勃発後に帰国した彼らが上海を拠点に上演した劇は文明戯と呼ばれ、一九一四年ごろには一大ブームとなった。多くの文明戯劇団は脚本を持たず、配役と簡単なあらすじを書いた幕表のみで演じる即興性の強い芝居であった。当然女優はおらず、男優が女形として舞台上立っていた。春柳社は脚本を使用し、日本の『不如帰』や『雲の響き』な

どの新派劇演目を上演していたが、毎日演目を変える必要性と、観客の嗜好に合わせて滑稽を取り入れるなど次第に脚本不足、稽古不足に陥った。「甲寅の中興」と呼ばれるブームの時期を過ぎると、春柳社も主要メンバー陸鏡若の死により活動が中断される。こうして文明戯は次第に下火となっていくた。

一九一九年に五四運動が起こり、新文化運動が繰り広げられると、演劇でも古い伝統を打ち崩し、新しい演劇を求める動きが起こった。この新劇運動を牽引したのは、北方の学生たちである。清末から演劇活動の盛んであった天津では、南開大学（当時は南開学校）の学生たちが創作劇を上演していた。周恩来も南開での学生時代、舞台上立って

いた一人だ。また北京でも、南開学校と同じく学生演劇が盛んであった清華学校や北京大学で新劇倶楽部が結成されるなど、新劇への関心は高まっていた。一九二〇年代には陳大悲により北京人芸専門学校が創設され、上海でも民衆戯劇社が起り、その機関紙『戯劇』で新劇理論や翻訳劇が掲載される。しかし、実際の舞台上では、近代劇としての新劇は未だ登場していなかった。伝統劇を改良し、時事的な要素や日本の新派劇の影響を受けた文明戯は、女性の存在やその演技形式において、完全な近代劇とはいえず、過渡的な産物であった。そのような時期に、舞台上でアメリカで学んだ作劇法と演出手法を見せたのが、洪深（一八九四—一九五五）であった。彼は今回のテーマであるオスカー・ワイルドの『ウィンダムミア夫人の扇』の中国版脚本の作者でもあり、演出家でもある。中国の近代劇誕生の指標とされるのがまさにこの『ウィンダムミア夫人の扇』であり、この上演の成功こそが中国話劇が舞台上に誕生した証であるのだ。

洪深のアメリカ留学と帰国後の作品『趙閻王』

洪深は清華学校で一九一二年から一九一六年まで学び、演劇活動の中心を担っていた。その後清華学校からアメリカ

カ・オハイオ大学へ窯業を学ぶために留学している。しかし一九一九年に父洪述祖が宋教仁（一八八二—一九一三）暗殺事件の首謀者の一人として逮捕、処刑されてしまう。この事件を契機に、洪深は窯業という実学を捨て、好きな演劇の道に進むことにした。演劇を学ぶため、ハーバード大学に転学し、ジョージ・ベイカー教授の47ワークショップに参加したのである。ベイカー教授は一九〇五年から英文科で演劇創作コースを担当し、一九一三年からは実験劇場47ワークショップを興した。学問の場である大学に演劇を持ち込んだ最初の人物であり、アメリカの小劇場演劇の始まりともなった。ハーバードの演劇倶楽部は一九〇八年に設立されている。中国では一九〇九年に天津南开学校での演劇活動が開始されており、学生演劇の起りはアメリカにそう遅れていない。

さて、洪深は一九一九年から一九二〇年までこのワークショップに参加した。ワークショップからは、ユージン・オニールが一九一四年から一九一五年まで参加しており、多くの劇作家を生み出した。ベイカー教授の授業は一二名から一五名ほどの少人数で、作品の創作と討論形式で進められた。洪深は『Return』というヨーロッパ大戦後の状況を描いた一幕劇で認められ、授業に参加する権利を得たと

いう。付属の実験劇場で創作した劇を上演し、観客の反応を観察し、さらに脚本に修正を加えていく。劇場では舞台道具や照明、衣裳、演技の一切を担当した。

トマス・ウルフの小説『Of time and the river』（一九六三）では、ボストンでユージンが参加するプロフェッサー・ハッチャーのドラマコースというのが登場する。そのモデルはベイカー教授と47ワークショップである。その周囲の人々の中に、中国人留学生のMr.Wangが登場する。Mr.Wangは官僚の息子で大金持ち、怠け者で浪費家で女好きの、騒々しい中国人として描かれており、おかしな英語を操り、どもりながら話す。このMr.Wangのモデルがどうやら官僚の息子であった洪深のことであるらしい。女好きというのは、洪深には当時アメリカで交際していた女性がいいたため、そのように書かれたようだ。当時のアメリカ人の持つアジア人への蔑視や偏見がMr.Wangのような人物を生み出したのであるが、真実の姿を伝えているとは思えない。ただ英語の発音に関しては、洪深自身自覚があったようで、ボストンでは本格的な発音の訓練を受けている。発音、演技、そしてダンスの専門的な訓練を受けて、ボストンの劇団で実践的に演劇を学んでいる。後には南洋兄弟煙草会社のアメリカ支店で総書記兼会計として勤務し

た。一九二二年二月には、南開学校校長の弟である張彭春がアメリカ留学中であることから、ブロードウェイで中国劇『木蘭』を上演し、大成功を収めた。この年の五月、中国本土で創刊されたのが『戯劇』である。洪深はさっそく編集部の手紙を送り、九月には汪仲賢から返事を受け取っている。一九二二年春に帰国した彼は、南洋兄弟煙草公司上海支店の総管理処理事や英文秘書を務め、七月には中国影片製造有限公司という映画会社の脚本コンテストの選人になっている。同年冬にオニールの『皇帝ジョーンズ』の翻案作品である『趙閻王』を創作し、一九二三年一月に『東方雜誌』（第二〇巻一、二号）に掲載された。オニールの『皇帝ジョーンズ』は皇帝の身分から奴隷の身に回帰していくのと反対に、洪深の『趙閻王』では主人公趙大は権力者の下で働く一兵士である。そして各幕に現れる幻影として、清末から民国にかけての国難、軍閥の暴挙を描いている。またオニールが第七幕で、ジョーンズが邪神の化身の象徴である鱈に命を奪われそうになる時、伝説の、自分の命を守るはずの「銀の銃弾」を打ち果たしてしまう。洪深はこの「銀の銃弾」の神話を排除しているのだ。銃弾を打ち果たし、趙大の精神的錯乱を提示した後、追加した第八幕ではそれまでの幻影のすべてを含んだ多数の人間、孫

悟空や武松といった伝説上の人物が武器を手に出現する。死者、空想上の人物たちに囲まれ、趙大は完全な狂気の世界に突入していく。オニールの「銀の銃弾」の神話性、鰐の持つ象徴性は消え、舞台上で具象的手段で狂気の世界を表現してみせた。『趙閻王』は一九二三年二月六日に笑舞台で上演されたが、残念ながら文明戯の劇場で上演され、俳優たちも文明戯出身者であったことから、失敗に終わってしまう。アメリカで一九二〇年一月一日プレイライツ・シアターで初演を迎えた『皇帝ジョーンズ』は、日本では大正一四年築地小劇場第二四回公演として三月一五日から二四日まで上演されている。本田満津二訳、青山杉作演出、主人公ジョーンズを演じたのは千田是也である。洪深は日本よりも早く『皇帝ジョーンズ』を中国に紹介したのだ。アメリカでの公演を洪深は恐らく目にしていたのではないだろうか。『趙閻王』は同時代のアメリカ演劇と、学んだ作劇法、演技方法を生かして書き上げた意欲作であった。

『ウィンダムミア夫人の扇』の中国での上演

一九二四年五月、上海戲劇協社が洪深翻案、演出の『ウィンダムミア夫人の扇』を上演した。この上演の成功は、中国話劇の嚆矢とされ、この時から真の話劇が誕生した。

そしてこの作品は中国人に好まれ、学生演劇や中国旅行劇団によって幾度も上演されている。舞台のみならず、一九二八年には明星影片会社が張石川、洪深監督で映画化し、一九三九年には華新映片会社が李萍倩監督により再び映画化した。なぜ、この作品は当時の中国人にこれほど愛されたのだろうか。

オスカー・ワイルドの原作は一八九一年に発表され、上海戲劇協社の上演から三〇年も前の作品である。あらずじを簡単にみておこう。

ウィンダムミア夫人は夫ウィンダムミア卿がアーリン夫人と交際していると誤解し、自分に好意を寄せるダーリントン卿の所へ行く。アーリン夫人は、ウィンダムミア夫人の実の母親である。アーリン夫人はウィンダムミア卿に娘に会いたいと相談していたのだ。誤解した娘が、かつての自分と同じ不倫の過ちを犯そうとするのをアーリン夫人は説得する。説得を聞き入れ、ダーリントン卿の家を出ようとする時、夫たちがやって来る。室内に自分の妻の扇があることから、妻の不貞を疑うウィンダムミア卿。そこへアーリン夫人が登場し、扇は自分が忘れたと言って娘の窮地を救うのだった。

洪深はこの作品を翻案し、登場人物の名前を中国風に改

めたばかりでなく、台詞もこなれた口語に訳した。「原作のストーリーを踏襲し、人物の環境、性格、言葉、風俗習慣を中国化させ、脚本そのものが人を引き付けた上に、中国の観衆の情緒に適合させた」と評価される通り、脚本の妙が成功の理由の一つであった。

当時の中国では、社交と恋愛問題を扱った同作は、かつて社会によって墮落させられた母親が娘の窮地を救う「慈母」として捉えられ、同時期の社会問題を描いているとして受け入れられた。自由恋愛や自由結婚を選択できず、墮落した人間が生まれ変わることでできない社会、金持ちや権力者の卑しさ、娘を思う慈母としての母親像を描いた同作は、中国が当時抱えている問題を含んでいた。そして、それを劇へと昇華したのが洪深であった。

上演の成功にはもう一つ、男女共演が挙げられる。それまでの文明戯や新劇では、女性が舞台上立つことはなく、女役は男性によって演じられた。しかし、アメリカ留学帰りの洪深は、女形を嫌い、この上演ではわざと欧陽予倩の『浣婦（気の強い女）』と『ウィンダム夫人の扇』を同時上演したという。『浣婦』は女形が演じ、『ウィンダム夫人の扇』は女子学生が女性を演じた。ちょうど一九二〇年代に各大学で男女共演が実行され、新劇倶楽部も登場して

きた時期である。女子学生が舞台上に登場する基盤が整い始めたことが上演の成功を後押しした。観客たちは、やはり女性は女性が演じるのが自然であると感じ、これ以降、男女共演が当たり前となっていくのである。

それにしても、一九二〇年代にヒットした芝居が、その後三〇年代になっても人気を維持して映画化もされるところは、不思議な気がする。物語の魅力の他に考えられる原因は、上流社会を描きファッション性に富んでいたことではないだろうか。戯劇協社より後にこの作品を上演したのは、専ら学生演劇である。当時の上海紙『申報』の記事や雑誌から上演記録を辿ると、「天津南開大学」（一九二五年五月、一九二六年五月）、「上海婦女慰勞会」（一九二七年八月四日、六日於中央大戲院）、「天津南開大学女学生新劇団」（一九二九年七月、十二月、一九二八年一月、一九二九年五月）、徐心波、李瓔という上海の広東人の話劇団体（一九二九年五月）、「蘇州」東吳大学で当時「四大ダイヤモンド」と呼ばれた女子学生呉劍群が上演（一九二九年七月）、「中華婦女節制会遊芸会」（一九三〇年一月）、「培成女学校」（一九三〇年六月）、「裨文女学校」が校舎建て替えの募金のために上演（一九三一年四月一日）、「復旦劇社」（一九四一年三月十日、一一日）、「東吳大学」が募金のため上演（一

九四一年五月七日）、ライシャムシアターで陸露明による公演（一九四二年九月一日）が挙げられる。このうち、「育成女学校」の女子学生の準備の様子をみると、リハーサルや衣装作り、切符売りに奔走し、授業後だけではなく土日も練習に励んでいたようだ。「劇中人物の服装は十分モダンな故、一人一人が新衣裳を作るのに数十元を惜しまず」とも新聞記事には掲載されている。

報道を見る限り、女子学生が演じることがクローズアップされる場合が多いように思う。女学生を惹きつけたこの作品の魅力は、モダンなファッションと、洗練された上流階級を舞台に繰り広げられる男女の駆け引きの妙にあったのだろう。

なお、一九二九年には日本でも留学生がこの作品を上演したようだ。南開大学の音楽家である黄女士は、日本の東京青年会遊芸会で上演し観客の称賛を浴びた。日本留学中の南開出身者王家駿は、南開留日分会の会長であり、交友楼の建設資金募金のために上演を企画したという。しかしこの上演に関する日本側の記録は不明である。

映画とラジオ劇

『ウィンダムミア夫人の扇』は、一九二五年にワーナー・ブ

ラザース社がエルンスト・ルビッチ監督で映画化した。この映画は、一九二六年に上海で上映されて大ヒットした。映画の中の説明が全て英語であったため、百代会社が洪深の舞台作品の台詞を映画の字幕に入れることにしたようだ。

中国では一九二八年に明星影片公司（張石川、洪深監督）が、一九三九年に華新影片公司（李萍倩監督）がそれぞれ映画化した。『申報』で同作の記事が多かった年は、一九二四年と一九二六年である。これは戯劇協社による舞台での上演の年と、ハリウッド版の上映の年にあたる。舞台での成功の後、ハリウッド版により同作がより広まっていったと考えられ、一九二〇年代後半には誰もが知っているお馴染みの作品となっていた。

一方で、舞台上演は一九二四年、一九二五年、一九二六年、一九二七年、一九二九年をピークに、それ以降は減ってしまふ。一九三〇年代には国民党による弾圧が強まり、左翼化傾向の強い話劇界の人々は上演場所を封鎖されたり、自らも追われたりするなど、上演に制限がかかる時期を迎える。そうした時期に、同作のような資産階級の好む芝居が思想的に問題視され始めた。

そして、舞台を失った同作は、一九三〇年代に入るとラジオ劇に行きつく。ラジオ劇のプログラムには「話劇」も

あり、『ウィンダムミア夫人の扇』はこの枠で演じられていた。プログラムからは観音社というラジオ劇劇団が午後七時一五分から八時までの間放送していたことが分かる。

一九四〇年代になると、ラジオ劇ではなく遊戯場で上演されるようになる。遊戯場は滑稽戲のように大衆的で通俗的な演目を上演しており、この時点で『ウィンダムミア夫人の扇』という話劇作品が、お笑い要素の強い滑稽戲へと変質したことを表している。

一九二〇年代にはモダン、フアッシュヨナブル、流行の最先端をいく作品だった同作は、一九三〇年代から「時勢に合わない」として非難の対象となり、ブルジョワの退廃劇は左傾化した話劇界でも時代遅れのものとなった。ラジオ劇の中で生き延びた同作は、一九四〇年代には滑稽戲として遊戯場で上演されるようになった。現在では話劇でも上演されることは少ないが、上海の地方劇滬劇の演目として残存している。滬劇では歌唱により母の思いを歌い上げ、母と娘の愛情に重点が置かれている。

華人文化圏での広がり

中国での『ウィンダムミア夫人の扇』の変遷を見てきたが、中国以外の華人文化圏でもこの作品は上演されている。タ

イの例を挙げよう。タイの華人による話劇活動は、一九二〇年代に始まった。中国人が伝えたのは、洪深の話劇『趙閻王』であった。これが現地の『小説林』（一九二二年）に掲載されたという。タイの華人による話劇も洪深から始まったのだ。一九三八年、一九三九年には中国旅行劇団もタイで公演し、曹禺の『雷雨』を上演した。中国の話劇を直接タイに持ち込んだのである。

マレーシアでの話劇も一九二二年から始まったようだ。『ウィンダムミア夫人の扇』は一九三四年に坤成女学校が懇親会で同作を上演したが、女学生が男装して演じたのが物議を醸した。中国の話劇は、脚本あるいは劇団を介して、南方の華人文化圏にも伝わっていたのである。そしてこうした動きが現地の話劇をより盛んにし、話劇の素地を築いていった。

華人文化圏では話劇以外にも、映画版の『ウィンダムミア夫人の扇』も恐らく上映されたであろう。ある作品が時代の変遷により劇から映画、ラジオ、滑稽戲、地方劇へと姿を変え、国境も超えて伝わっていく。『ウィンダムミア夫人の扇』は、一つの作品を追うことで、華人文化圏での文化の広がり的一端を垣間見ることのできる好例といえよう。

（立教大学ランゲージセンター）